

プラトン国家篇研究 (Ⅷ—Ⅹ)

遠藤 貞吉

第八篇 五四三—第九篇 五八〇 a

以上理想的国家の成立について論じたソクラテスは、以下それが次第に墮落する徑路について語る。ソクラテスはそれを一步一步年代をおつて語っているが、實際の歴史はそのような順序をふんだわけではなく、人間の魂には善の要素と惡の要素があり、人がそのいづれに従うかによつて、人としても、国としても向上し或は向下することを、心理の分析によつて論理的にのべたのである。アリストテレスはじめ或る人々は、その説く所史実にあわぬを批評したが、それはソクラテス（実はプラトン¹⁾）の意図したところではない。現實は善惡いずれも純粹に存在するものではなく、両者相争いつゝ動揺しつゝ展開している。魂は欲望、氣力、理性の三部分よりなり、それらが各々の務を果しつゝ、全体として調和すればそれが、自然の姿、理想の状態であるが、かゝる理想の境には達しがたく、達しても永くそこに止り得ないのが人間の宿命である。魂の状態は外に表われて個人々々の特殊の姿を示し、そのような同じ種の人間が優勢を占める国はやがてそれら個人にふさわしい国柄となる。ソクラテスはギリシアの諸国の国状をこのようにして説明しようとした。²⁾

抑最善き国ともあるものが如何にして悪しくなるか。理想の政治が變化するのは、政治力の分裂からである。もし政治力が固く一致して居れば變動する筈がない。しかし理想国に何故不一致が生じるかは、ミューズの神々ならでは³⁾わからぬ。とにかく生じたものは亡びる。理想国の統治者は英智とよい教育と併せもつてゐるが、全智でない。完

全な児を産む目算を誤つて不肖の子が生れることがあるだろう。かゝる不肖の子が統治者となるなら国民の資質を弁知せず秩序は破れ争が生じるとミューズは説明するだろう。

さて同じ統治者の中にもかようにして、優れたもの劣れるものが生じると、その間に対立衝突が生じ、結局妥協して財産を私有し、自由民を奴隸化するに至ればこゝにアリストクラティアとオリガルキア⁽⁵⁾の中間の政体が生じる、こゝではアリストクラティアにおけると同じく統治者を敬い、防護者階級が農工商を避け共同生活を営み体育につとめはするが、権力は戦を好み戦に巧な人に帰する、又オリガルキアにおけると同じく、ひそかに富を渴望し自らこれを獲得する法を知らないから謀略擄取によつてこれを食べ、こゝに優勢なるは氣力的要素である。かゝる政体の下における国民はその政体と同じく鬭争の自己主張的で教養ある人の如く、文学をやるが文学的でなく、奴隸を辱めはしないが、粗暴である、他の自由人に対しては町重で、殊に権威に従順である、彼等が統治者たらんとするのは言論によるのではなく、軍事の才幹によつてである。年とるにつれ富と慾がつゐる。かゝる統治者の父は勇敢で、乱れた世の中にも堅実に身を持ち、権勢を避けるような人物であるが、その妻はそれを氣概がないかの如くに思い、僕さえそう思ひこんで、息子には強くなつて不当な扱には報復せよと教える。息子はかくて一方では理性的にとしこまれ、他方では情熱欲望をあおられ、生来悪人でもないから中間的な存在となる、それがティモクラティアである⁽⁶⁾。

オリガルキアにおいては万事富を基とする、富のためには法をもまげ、名譽はさほどに重んじなくなる、富によつて市民の資格も獲得され、富は能力に相應していない。市民は貧富の二派に分れ、戦に際しては民衆に武装させるが、それが甚だ危険である。財産のないもの、又それを失うた者は、する仕事もなく惡に陥る。有為の士がかゝる世の中で失脚したり迫害されるのを見た若者は名譽や権力に志をたち、只々錢もうけに熱中し、理性もそれに利用され、氣力もそれに屈する。人々は金錢のために勤勉で、必要な欲望のほか余計な欲望は抑え吝嗇である。教養なき人

はとかく貧民となり悪漢となろうとする。

オリガルキアの国では只富のみが追求され、統治者は権力が富に基くのを知つて、放恣な青年の濫費を抑制もせず、よき家柄の子弟が次第に資産を失うに任せる、かような国では富の愛と中庸とは同居する事ができず、商人共は金錢を貸して幾倍にしてとり戻し、統治者はそれを看過し只金錢を作る事に努めて、徳を修めない、その子弟に至つては柔弱で事に耐えない、部下は彼等の無力を見ぬく。かくて病身の人と同じく、かゝる国は僅かな事にも混乱し、終に無産者の蜂起によつてデモクラティアになり下る[？]。

この国では好ましくない者共は殺したり、放逐し、味方の間には自由と権力とを分け、役は籤できめる。こゝでは只々自由が求められ、戦うも利するも、役につくもつかぬも心の儘であり、国に厳しい掟はなく、混乱乱雑の世の中で、等しきもの等しからぬ者に一樣の平等が与えられている。一体オリガルキア的な父の子弟は吝嗇に育つている。樂みの中には質素な食事のように、これを斥けるわけにはいかず、むしろそれを満たす事が吾々に有利なような樂しみ、即利益になる樂みと或種の御馳走のように、若い時の修養でこれを斥ける事ができ、そんなものを食べると身の害になるような樂み、即損になる樂みがある。オリガルキアの若者は元來は吝嗇で必要な樂しみのを求めるていたのだが、怠け者や勝手な樂しみに耽る狡猾の人々をみるにつけ、外から見せつけられる欲望は、彼のうちなる欲望に呼応する一方、父親その他の忠言勸告は心の中のオリガルキアの原理を覚醒させ、心中に二元の争が生じる。もしよき教育をうけていなければ、青年は誘惑にまけて、無秩序を自由、無礼を勇氣、浪費を寛宏と称して放埒な生活をするか、又時とすると自制克己の生活に立ち帰ることもある。

自由の欲求は際限ないものである、凡て我が權威にふれるものを憎み、何事にも勝手をする、かくて主人も従者もなく、男女の区別もない。凡ての人は同一水準の上に立ち、秩序は失われる。ところが凡て物事は極端になると反動を招く、自由の過度はやがて隸屬の過度を生ぜしめる、怠け者の中で勇敢なる者が首領となり、怯懦なものがその

徒党となつて動亂を起す。このようなとき本来なら国家の立法者は、これを防ぐ法を制定し秩序の維持につとめるのであるが、今や大多数の民衆が全支配權を握り万事を勝手にしている。富者の群は無産者をはなれ、秩序を保ち、自らを守ろうとしているが、無産者の大衆は首領が富者から富を奪いとり、大部分は自分達の手に納め、多少は彼等民衆に分配してくれるとき、集合してそれに協力する。富者の群は大衆が無知のため或は密告によつて自分等を敵として迫害するのを防がねばならぬ。かくて告発訴訟に訴える。無産大衆にはその擁護者があつて、手許に徒党をつれているので、勝手をして、正に不利と思う人を法廷にひき出して追放したり刑に処したりし、又吾身の安全のため護衛の者をおく。彼は統卒者として武力を握つてゐるためには、外敵がなくなれば、自ら何かの戦争を挑発する。民衆に富の力を持たせないためには絶えず税をとり立てる。彼等を守り立てた人々の間にも、彼等を批評する者が現われるが、それは殺してしまふ。仲間の悪人達からも、又善人達からも憎まれるようになる。かようにして僭主が現われるが、彼等は軍隊を保つためには、神聖な財宝も流用し、彼等の犠牲からも財産を奪い、他に金錢を得る道がなくなれば、彼等を養ひ育てゝくれないわば父たる民衆からそれを得ようとする。民衆は実は子こそ父を養ふ義務があるとして、不心得な彼等を逐い出そうとするが、今は彼等の方が民衆より強くなつてゐるのである。

僭主的な人間は僭主的政体にふさわしい性格をもつてゐる。一体必要でもない楽しみの中には非法的なものがある。凡ての人がこうした楽しみ或は欲求をもつてゐるのだが、或る人は掟とより善き欲求によつて、理性の助けで、そのような欲求を抑制し、或は全然それを排除し、或は数少く力弱きものとしてしまつてゐる。然るに他の人々においてはかゝる欲求は数も多く力も強く、魂の理性部分や他の部分の眠つてゐる間にのさばり出て、放縱無慚の振舞をする。健全な人であると、理性の働きによつて、欲求は程よく満足させておいて、理性はそれがために妨もうけず、その務めを果している。最高潔な人でもこのような非法的な動物的な要素をもつてゐる。元來デモクラチア的人の人は必要もない、裝飾的な樂みを斥け、只管金錢の欲を追つてゐるがこのような人が欲望の多い趣味のある人と交りその

感化をうけると、善惡の二方向に迷い中途半把の処にいる。非法な人に誘惑されると、終に情熱が彼の心を占有し、それからは分別なく恥もしらない。愛慾は僭主的であるというのも尤である。もし彼が生來の性により、或は習慣により、或は両者の力によつて、情熱に流され、快樂に耽るに至れば、これぞ完全な僭主である。このような人の心に愛慾の念が起ると、他の様々の慾念を誘い出し、それを満足さすべき金錢が足りなくなると、あらゆる手段を構じ、道念も失い、もとは只夢の中でのみみたような所行も白昼行つて憚らない。このような手合が少数の間は他の僭主の護衛兵とか傭兵になつて、只小さな惡事をやつているだけだが、一味が多数になると、その中でも最有力なものが首領となつて本当の僭主になる。

国は個人の姿を郭大して見せる。僭主の国では凡ては奴隸的で自由がなく、少数の自由人さえ奴隸の境遇に居る。国は貧しく僭主は貪吞であく事を知らず、恐怖は国に充ちている。僭主は多くの奴隸をもつてはいても、これに信頼の念をおく事ができず。その反抗裏切を恐れて常にその歛心を求め、自分の方が却つて奴隸となつてゐる。個人も國に相似で、その欲望部分が狂暴で、理性部分や氣力部分を抑えているような魂の中には恐怖猜疑嫉妬が活動してゐて、平安幸福はそこに見出されない。思うまゝをなして憚らぬ大胆な惡人はこの世を幸福に暮すように見えるが、その実最不幸な人間である。

第九篇 五八〇a—五九二〇b

屢々いうが如く、人の魂には三原理が具つてゐる。人はその理性原理によつて学び、氣力原理によつて怒り、欲望原理によつて欲望する。欲望には飲食はじめ諸種の感覺的欲望があり、金錢の欲望もある。氣力の原理は常に支配征服名譽を求め、野心的鬭争的である。理性原理は真理の探求に専心し、利益や名譽にはさまで心をひかれない。さて知を愛する者は知を得る樂を喜び、名を愛する者は名を得る樂を喜び、利を愛する者は利を得る樂を喜んで、各々自

分の樂こそ眞の樂だと思つてゐる。それでは今正邪善惡の立場をはなれ、只樂みを樂みとして判定するとせば、誰かその任にたえ得る者であらうか。それは經驗と英知と理性とである。まづ利益を得るの樂みは知を愛する者とても、少時にそうした經驗を必ずもつてゐる。だが愛知の樂しみは利を愛する者には分らない。名譽を追い求める者にも愛知の喜はわからない。だが名譽については、知を愛する者も、名を愛する者も、利を愛する者も、それぞれ自分の目的を達成するなら、自然名譽を得るわけだから、三者ともこれを知つてゐる筈である。とすればこの事の判定をなし得る者は知を愛する人でなければならぬ。次に何によつて判断するか。勿論理性によつてゐる。理性は自分にとつての樂しみ、知の樂みを以て最高の樂みとする。第三に英知によつて判定しよう。一体快は苦に對するものであり、又快でもなく苦でもなく中間もある。たとえば病氣になつてはじめて健康の幸福である事を知るように、苦はもしその苦から解放されると快を感じる。その中間状態は時によつて苦でもあり、或は快でもある。いづれでもあるという事は、いづれでもないという事なのでつまり快とか苦とかは實在ではなく現象であり、云わば心の迷いである。肉体を通して魂にくる激しい快感は多くは苦からの解放である。又それらの予想からくるのである。

たとえば空中に上中下の三階層があるとする。二段までしかしらない人は、中段までの處で上だの下だのと考えてゐる。又白を經驗した事のない人は只黒や灰やで白さを比較してゐる。肉体は精神とはちがつて實在性の乏しいものである。ところで吾々は吾々に本来適合したものにみたとされると快感を感じるのだが、身体に適したものの、身体に役立つものは、精神に役立つものに比べて、實在性は遙に乏しい。快の中でも實在性に富むものにみたとされて感じる快が本當の快である。知慧も徳も知らないで只肉体的の快感を追い求める者や名譽を求める人々は、中段までしか知らないで、それ以上に行く事はできないし、見た事もない。低い處でめいめいの快を求めている。然し利益を求め、名譽を求める欲望も、それが理性と知識の指導に従い、又それ等と協同して快を求めるなら、それぞれに許された眞の快を得る事はできる。彼等にとつて最善きものは、彼等にとつて最自然的なものであるとするなら、最自然的な快を

獲得するのである。

もし魂全体が、理性原理の部分の支配に従うなら、各部分は分裂する事なく、各自の務めをつくして、各自に可能な最高最善の快を得る。しかし三部分のいづれの部分にしても越権を働くなら、自らの快を味うこともできず、又他をして影のようなとりとめのない快を追わしめる。かの僭主はそれ故に、真の快より遠ざかる事最大なるものである。⁹

此上もなき惡しき人間は、外面には正しいと思わせ、その正しからざるによつて利得をしているのだという人がある。果してそうであるか。人間はたとえてみると、人間の姿をしたその中に、昔の人の考えていたような、種々な動物の首を胴体につけた怪物と、獅子と人間の要素をおさめている。もし人間の要素を餓しておいて、獅子や怪物を勢よく育てるなら、そこに平和幸福があるか。獅子や怪物はお互の間に争つてゐる。貴い人間を低くめ、獅子や怪物の愛するものを手に入れても何の幸でもない。彼等の喜ぶところの放恣、短慮、贅沢、卑陋、阿諛のとるに足らず、いとわしきものたることは昔からきまつてゐる。心の中の獸的要素が、人間的要素、むしろその中の神的要素に治められてゐるものは高貴な人である。凡ての人がこのようなものになる事はできぬとすれば、その域に達するまでは、外からそのようにしている事が必要であらう。一国の法律も、子供のしつけもそういう意味のものでないか。¹⁰ 本当に分別ある人は吾身を決して不合理的な野卑な快に任すことをしない。吾身を美しく強く健やかにする事さえ、それが我をして節度あらしめ、身体を魂に調和させるのでなくば、それを欲しない。彼にとつては名譽を得、富を得るにも、秩序調和の原理によるのである。かような人はよく自分の心の国の統治者となるだろう。だがこの善き国を維持し、それを乱す虞のある物事を極力排除しようとする彼は、現実の吾が国家を見てそれを統治しようとは思ひまい。この理想国はそれ故、只言論の中にのみ存し、地上のいづこにも実在しないという事は、決して無意義というわけでない。これを見て吾心の中に理想国を建設しようと思う人には、その典型としてどこかにそれは存在している。

理想国の退化、理想人の墮落について、私は割合に詳しく紹介した。それはプラトンの思想の解説や紹介を通して、国家の構成と人の魂の組織を学ぶとき、それがあまり図式的であり、人為的で、現実をあまり見ないで只理想的のべられていような感じがするが、しかし以上の概説でもわかるように、その実、非常によく現実を觀察している。心理の機微をうがつた非常に示唆的な言葉が少からず見出される。

とにかく信念を以て俗的な事に超然たるものが、その家族によつてすら勇氣手腕を缺くものゝ如く侮られるとか、真面目に或はむしろ吝嗇頑固に育つた者が一度世俗の快樂に眼をさました後の墮落とか、自主自律のできるまでの法律や教育の任務とか、プラトンが世間の現実をも充分觀察している事を示している。私共はやくもするとプラトンの理想主義とアリストテレスの現実主義の対立といったような事をきかされてきたが、そうした意味の事もあるうが、普通に簡単に考えられているようなものでない事、プラトンはどうしても直接に触れなくてはならぬ事を信じる。詳しく述べられている政治や国民の腐敗墮落の経過をよむとき、それはどこかの政治、政党の実状に想い合せて、何ときたならしくいやらしいものであるかをつくづく思いかえすのである。然し人間のうちには善の原理と惡の原理がある。理想の国、理想の人も努力を怠るならば忽ち墮落するものである。というよりもむしろ人間はその本質において二元的であり相対的であつて、その二元を調和或は克服するところに人間の進歩があると同時に、偏倚狹隘に陥る危険がある。それで吾々の社会において各自の意見を主張するという事は、吾意見について彼の批判をうけ、彼の意見について吾批判を与え、両者を超えたより広いより正しい意見に到達しようという事である。この事は二つの政党の関係についても、教師と生徒についても、芸術の一つの流派と他の流派についても、一つの問題に関する一つの学説と他の学説についても云われ得る事である。例えば風俗をみだす虞は作者の意図や作品の出来ばえよりか、むしろ主として一般民衆の教養の度や彼等のその作品のむかえ方によるので、檢察官が道義の代表者を氣どる必要もなければ、文芸家が文化人として特別の待遇を要求する権利もない。又たとえ不良青年といえども、その人権が侵害されよ

うとするならそのために立つて彼等の人權を守る事は必要であるが、そのために正しく彼等を指導監督する事を忘れて、社会に対する害悪を行わせたり、彼等をして自ら反省悔悟する事なく、却つて思い上らせるような事があるなら、それは社会に対しても決して善い事でなかつたといわねばならぬ。

第十篇 五九五 a—六〇八 b

ソクラテスはこゝに話の筋をかえて、理想国における芸術の問題に向う。模倣を事とする詩が理想国から斥けられるという事は喜ぶべき事であるというのである。自分は少年時代よりホメロスには畏服し又これを愛してはいたが、詩的模倣がその解毒剤として原物の眞の性質についての認識をもたないなら人の知性にとつては有害だと思わざるを得ない。多くの同種類の個体が一つの名称でよばれているなら、それらを通して、この一つの名称に対応するもの、形、イデアがある。たとえば寢台に例をとる。工匠が寢台を作るのは自分勝手な寢台を作るのではなく、その原物を物質を以て現わしたので本来の現物は神によつて作られ、自然の中に只一つあるのみである。画工はこの原物を写しであるところの物質の寢台を更に写したものである。寢台そのものの、寢台の本質は、神が自然の創造過程によつて作つたもので、それを見る立場によつて異なるといふものではない。然しその現象は種々異つてゐる。工匠が現物を写し、画工が更にそれを写す如く詩人も眞実を三重にはなれてゐる。詩人は只現象を詳しく写すのでさも全知であるかの如く思われている。もし人が原理も造れる、そのの写しも造れるといふのであるならば、何を好んで写しを作るだろうか。詩人はたとえば医療のことを詳しく述べてゐるが、本当に医療を知つてゐるのだつたら、自分で病の治療もできる筈である。もしホメロスが眞理を距る事が二歩だけの事なら、如何な仕事か人を善くし、又如何なる仕事か人を悪くするかを弁えていて、国家も彼の援助を求めた筈である。しかし彼は技術者としても、教師としても、否友人としても何の役に立つてゐない。彼は只文句を韻律、調音、抑揚^(レ)を以て語るので、こうした技術によつて塗りあ

げたその色どりを剥がしてみたら、文学作品はつまらぬものである。

物にはこれを使用する者と製作するものと、模倣する者となる。使用する者はその物について最多く経験し、最もこれを知つて居て、製作する者にその物の具合のよしあしを仔細に告げる。製作者は使用者から様子を聞いて正しい考をもっている。処が模倣者或は模造者は直接知りもしなければ、知る人から教えられて正しい考をもっているわけでもない。詩人は大衆にとつて善いと思われるものを模造するにすぎない。同じものでも、これを見る位置によつて形が異なる。又空中で見るのと水中で見るのと異なる。このようなとかく迷誤に陥る感覚に、模倣の術は訴えるのである。眼に見えるまゝに見る仕方に対し、実際について測定する技術がある。眼に見えるところと実際に測定するものと互に異るとせば、それは同じ魂でも見る働をする部分と、測定の働をする部分とが異なるからである。

善良な人はたとえ子供を失つても、他の人々よりも平静にこれを忍び、人の前にては特別控え目である。悲しみの感情を抑えるのは理性である。悲嘆といったような感動の面はこれを模倣する事ができ、通常の人にはこの模倣をみて理會する。然し感動を抑制する理性の様は模倣し難く、模倣しても通常人には仲々理會ができない。詩人と画家とは類縁の近いもので、いづれもその製作には真理性が少く、いづれも人間の魂のより低い部分に親しくする。人々は詩人の描いている人物の悲嘆に同情して自分も嘆き悲しむのに、自分自身の悲嘆についてはこれを抑制するのがよいという。自然の性情としては悲しみ泣いて、悲をほらそうとしたい。それを吾身については控えようとしながら、詩人によつて他人の身の上についてはどこまでも感情を恣にしうというのはその人が理性化されていないからで、彼等はいさした快感を求めて、詩を捨てないのである。しかしこのように他人の悲嘆によせて吾心の中に哀傷の氣持を育てるなら、自分がそうした事を経験する場合、それに耐えがたくなるだろうと氣づかぬ人が多い。ホメロスは偉大な詩人である。教育のために彼の詩を用いるとならばそれは神々を讚美し、偉大な人々を讚美した詩であるべきである。そこで徒らに感傷をそゝるような芸術は理想国から排斥すべきで、昔から詩と哲学との間に争がある。

以上ソクラテスの文芸論は吾々としてすぐには承認できない。しかし彼が指摘したような批判もたしかに加え得られる。私はさきに倫理的価値に二つの立場があり、一つはいわば主観的のもので、行動を内面から、殊に動機に関係して判断する立場で、これを場における価値判断と名づけた。も一つは客観的とも云うべきもので、行動をその凡ての対他的関係において判断する立場で、これを場についての価値判断と名づけた。この二つの立場は文化が高度になる程、否、文化が複雑になり、人間がソフィステイケートされる程はなれてくる。純粹の科学においても、芸術においても、政治においてもそれがある。ソクラテスの文芸論は文芸の客観的立場の議論、殊に教育における文芸の価値意義の論である。その意味において彼の文芸論は決して現代的意義なしとしない。只彼の議論が今日の吾々にとって特異なものがあるのは、文芸の客観的な任務と、文芸本来の本質とが一つにされているに依るのである。この事はカロカーストという単語をもつ、美であるから善、善であるから美、又善美なるものは即利益になるという事が当然の考方であつた当時の思想及生活から理解されるべき事であらう。

第十篇 六〇八一—六二二 d

詩の議論は教育の立場からなされたのであり、教育は結局正義の人を養うためのもの、正義、徳は魂の不滅の議論に導く。

世の中に善と悪とがあり、悪は物を腐らせ毀すものであり、善はものを保ち善くするものである。凡てのものは善と悪を具えて居る。ものの亡びるのはその中に具つてゐる悪の仕事で、善、又善にも悪にもあらぬものはそれを亡すものでない。たとえ或るものがその中に腐りをもつていても、その腐りはそのものゝ破壊を来すようなものでないなら、それによつてその物が亡びる事はなく、まして他のものゝもつ腐のため亡びる事はない。たとえ悪人が悪事が見つかつて所刑されるとしても、それが彼の魂の悪たる不義のために亡んだのであると考へてはならない。それはむしろ

ろこう考えるべきである。身体が悪は身体を分解消費して、もはや身体でないものとしてしまうところの病である。その他のいろいろのもの、それに附着し内在するそれ自身の腐りのために亡びるのである。腐つた食物がそのまゝにすぐ身体を亡すのではなく、それが身体自身の腐りを誘発し、そのために身体は亡びるのである。だからどんな病も、傷害もそれがため魂そのものが腐らされるような心の病毒が誘発されるのでなければ、それが身体に加えられようと、魂が亡される事はない。ところがもし人が魂の不滅を否定しようと思つて死にかゝつてゐる人はだんだん悪しく又不義になると主張するとして、かりにこのような主張を是認するなら、成程それでは不義は身体の病と同じように不義なものにとつては命とりで、この心の病にかゝつた人は、固有の破壊をもつ生来の力によつて亡されると云えようが、それでもその死方と悪人がその所行の罰に殺される死方とは異なる意味のものである。しかし不義なるものにとつて不義が命とりだとすると、不義なるものは死によつて却つて不義から解放される事になる筈だが、實際は不義は人をして不義を行わしめ、それによつて不義なるものは悪行を重ね人を殺し、勢ついて却つて殺されるのではない。

とにかく魂は魂特有の悪によつても亡びない。それは不滅である。その数が減じる事もなく、増す事もなく、その本性において差異はない。さりながら、今現にある魂は傷がついたり、外のものがその上にくゝついたりして、見るもむざんな姿を呈している。けれど魂の本質は失わずに居るので、理性の眼を以て見るなら、元來の姿を認め得るので、それは知の愛である。もし魂が本來の傾向を追つていくなら、当然正義はそれが実現せんとするものであり、それはとりもなおさずその幸福である。たとえ外面的には貧困であらうと、病苦に悩もうとも、その他如何なる災禍をうけようと、結局は正しい魂にとつては利益となるものである。神も人も正しき魂はこれを認め且つ賞せざるを得ない。先きに正義の極端として、あくまで正義を踏み行いながら尚かつ不正義と誤解されて、迫害をうける人と、不正義の極端としてどこまでも不正義をたくましくしながら、しかも正義の士を絆うて無上の厚遇をうける人を仮想し

だが、それは只説明のためのもので、そうした仮定は何の必要もない。善き魂と悪しき魂が不滅の来世でうける祝福と罰に比べるなら、この世のそれ等は殆ど物の数にはいらない。こゝに戦に傷いて死んだエルが死んで十二日目再びよみがえり、冥土で見た死者達の光景が詳しく述べられている。

魂の不滅についてはパイドンにおいても論ぜられている。むしろそれはパイドンの主要問題である。私は近くパイドンについて書く機会がありそうなので、それにおいて魂の不滅について論じたいと思うが、要するに幾多の論証必しも説得的ではない。死後の生活についての伝承は理性にとつてはそのままには到底信じられない。しかし魂が不死であるとしたら死後の魂の在り場所や在り方についてはそうした伝承に近いものがあると考えねばならぬ、とソクラテスが述べているが、その根本の信念は、義人の魂は何かの意味で不朽の実在性をもち、それに対する報酬は正義そのものであつて、外から与えられた何ものでもないという事であらう。

あとがき

もともとこの論文は専門的研究者に私の研究とか意見をきいてもらうためのものでなく、相当以上の教養を志す一般人士のための案内の意味のものであつた。多くのすぐれた思想家の中にもプラトンは、何かの仲介によつて簡単に撰取すべきものでなく、直接原物をかみしめ、齒の力胃の腑の力に応じて、その味と榮養をとるべきものである。世の中にあまりに多くのエキスや罐詰や干物やソーセイジ様のものがプラトンの思想について作られて居る事は、私共にとつて利益もあつたが、大きな不利益もあり、しかもそれを気づかずに居た事が切に反省されて、この研究を「論集」にのせていただいたのである。論文の後半は私は神戸女学院大学の正規の教員でなくなつてからの執筆にかゝわず、最後まで登載の便宜を与えられた事について、「論集」編集の責任者に厚く謝意を表するものである。

註

(1) プラトンの對話におけるソクラテスの抱懐する意見が、實際ソクラテスその人の意見であつたか、或は彼が真に考えていた根本思想の拡充、展開であつたか、或はもはやソクラテスその人の思想というよりも、彼の弟子であるプラトン自身の思想であるか、その判別は真にむづかしい。論集第二号拙稿註(一)参照。

(2) ソクラテスのあげた不完全な或はあしき政体の順序は吾々現代人の考えているところと異なる。或はむしろそれ等政体の名称は吾々が普通理解しているところのものと異なる。それについては今日の国家と当時のギリシアの都市国家規模がまるで違つてゐる事、奇蹟的と思われる程の短期間にすぐれた思想家藝術家を輩出せしめたアテナイはプラトン時代にはもう爛熟の期を過ぎて衰頹期に入つてゐる一方、それと殆ど対蹠的性格をもつスバルタが、それに代つて勢を得つゝあつた事、且つギリシア諸都市国家の盛衰はそれ以後の世界の歴史の進展における期間に比べると、極短時期であつた事などを考え合せるべきであらう。

(3) プラトンは形而上学の問題を論するとき、或は蓋然性を以てしか主張できぬ場合神話の形式をかりる。論集第三卷第一号拙稿註(8)

(4) 凡て生物にはすぐれた子供を産むに適した期間があるが、人間はそうした期間を自ら知りつくしていない。そのためすぐれた親達も必しもすぐれた子供を産むとかざらず。という。このあたりいろいろの数關係を以て、合理的らしく論じているがが要するに理解しがたい。又根本の思想の把握にこの数理的説明が必要でない。

(5) 理想の政体はアリストクラティアである。文字の意味は最すぐれた人々による政治であつて、プラトンの意味するのは、それであらうが、現実的にはギリシア時代にも最強力な人々の政治をいつたのであらう。オリガルキアは少数の個人或は家族による政治、所謂寡頭政治、しかしここにはアリストクラティアにおける如き、「すぐれた」との形容詞がない。

(6) テイモクラティア、名譽欲に動かされる人々による政治。人間の魂の三部分についていえば氣力的部分の最強の人達、社会層でいえば軍人階級の支配する政体である。

(7) オリガルキアでは第三階層たる営利業者的人々、魂の第三部分たる欲情の盛んな世界である。

(8) デモクラチア。民衆の政治、ここでは社会の階層は全く解体され、絶体の自由平等が主張される。今日の諸国民の要求するデモクラシーは全然別物である。それに拘らず、吾々の間のデモクラシーも一般民衆の自覚と教養を缺いたなら、すぐにもここに描かれたデモクラチアの困乱に陥る。どんな立派な組織制度ができようとも、一般民衆の向上的努力を缺いたなら、墜落破滅が眼の前に迫ってくるのが人間の避けられない宿命である。平和、自由、人權とかそれだけを念仏のように唱えまわつても何にもならない。

(9) 絶体の自由、平等の下にはもはや本当の自由、平等はない。この極端を救うための極端が僭主制である。然し僭主制が国家の滅亡でなく、批判、反省、自覚が次第に民衆の中に力を得て再び、改革向上への道をたどる事になる。

(10) ここでも僭主の所謂快は哲学者の眞の快を去ることいくらと、数に訴え、平方や立法などが取扱つてある。そしてここでもそうした数的関係は無視しても、議論の本旨には関係はない。ともかくプラトンが数学者でもあつた事は、こうした数の取扱ひに關係あるであらう。

(11) ここに法律やしつけが一般の人々の共同生活に必要な粹であると共に、彼等がそうした粹を必要としなくなるまでの準備の段階でもある事を示唆している。

(12) 新聞が吾国の今日の政治及政治家について報道するところのもの、多分誤解誇張に基くものも少くないであらう。しかしそうした醜聞が語られしかも信ぜられるのは、少くともそうした醜惡な要素が事実存在しているからにちがいない。政治、殊に民主政治はまづ第一に一般民衆の信頼を得なくてはならぬから、そして事実一般民衆は教養や道德的意識が左程高くないのが常であるから、とかく政治は欺満や権謀や利益に訴えて民意を取めようとし、又政治的手腕のあるものの中にも名譽利益を好む者が少くない。自然政治や政治家にはいつも墮落の危険があるのであるが、しかし他方そこまで疑をかけながら、なおともかく一国の維持が保たれ、ともかく何程の幸福が保障され、将来に希望がもてるところを見ると、眞理正義が無能力な觀念にすぎないようでは人間思想行動の中に働いている事を認めざるを得ない。

(13) ショーペンハウエルもその藝術論(意志及表象としての世界、第三卷)においてこれらの詩的技功は云はば甲冑であつて、人

はこれを着て居れば、何はゞからず思つた通り云えるとし、又これ等の技功は精神作用の本質たる時間の流れに特質を与え、快感を呼び起さしめるもので、どんな平凡な思想でもかような快感を十分与えられた上できくなら、さも意味深さうな気がするものであるといつてい。

Endo, Teikichi

Study on Plato's Republic (VIII—X)

Résumé

Study on Plato's Republic (concluded) VIII 543—IX 580. It is depicted how the ideal state degenerates successively into timocracy, then into oligarchy, and democracy and at last into tyranny. Corresponding changes are to be observed in each state's individual citizens. Even the philosopher king may at any time degenerate if he neglects self-culture. Man must be always on his guard.

IX 580—592. True pleasure or happiness is available only through reason. Justice is in itself the reward and blessing to the just soul. Though a typical idealist, Plato never fails to observe the psychology of actual people. Socrates says there rule in a human soul the principle of good and that of evil. The present writer understands them to be rather two principles tending to work in ways opposite to each other. When balance is kept between them, it is the state of security, happiness and good.

X 595—608. View of literature or art is stated. Socrates' view seems very peculiar, but from the standpoint of the influence of art on people, particularly of its educational effect on young people, we must agree with him.

X 608—621. Immortality of soul is discussed, but the reasons for it are not convincing. I even suspect Socrates himself is aware of it. What matters most is his conviction that justice and just soul are in no way destructible.

In conclusion. I recommend young people to read Plato at first hand, otherwise they will miss benefits in various senses to be got from him,—in idea, in way of thinking, in questions offered to think about, or in miscellaneous significant suggestions.